

保育の日常を問う

——環境としての自然とどう向きあうか——
(付)

新井 孝昭

はじめに

日本保育学会第四十八回大会（一九九五）において、筆者らは『子どもにとって「環境（自然）」とは何か』というテーマで自主シンポジウムを開いた。^{註1} その場で、筆者は話題提供者として、従来の保育の中での自然の扱い、研究の在り方の問題点をいくつか指摘した。そして、次のことに関しては共感をいただけたと思っっている。ひとつは、感性豊かな子どもを育てたいという願いのもとに、自然の仕組みや有機的なつながりを軽視した

愛玩物的な動物とのかかわりなどを保育の中で強調してしまう傾向に、強い疑問の念を抱かざるを得ないということ、もうひとつは、「保育に適している動物は、扱いやすく子どもに害を加えにくいウサギのような動物である」というような物言いに賛成することはできないということである。

ところで、当然のことながら、すべての大人たちが例外なくかつての幼児（子ども）であり、いま保育を受けている子どもたちも、その行き着いた者としての大人に

よって育てられている。この様な長いタイムスケールの入れ子構造的関係をもつ保育という営みの中で、環境（自然）との間にどのような関係（保育実践）を積み重ねることが、子どもの育ちを通して幾許かの明るい未来を共有できることにつながり得るのか、思っていることを以下に述べたいと思う。

あるエピソードから

今年の夏、わが家の子どもが、親類の方から「カイコ」の飼育教材のようなものをいただいた。その飼育説明書の表紙には、カイコが「ほくの体は、すごくデリケートです。大切に飼ってくださいね」と、これから育てられる子どもにお願いしているかわいイイラストが大きく載っていた。子どもも私も今までカイコがまゆをつくる過程を見たこともなく、いただいたのを良い機会と思い説明書を片手に育て始めた。丁寧に書いてある説明書を読み進めていくうちに「おやつ？」と思う次の文章が目に入った。「病気のカイコや死んだカイコ、ふ

ん、カイコが食べ残した乾いた人工飼料、さなぎ、ガ、などはポリ袋に入れ、台所のゴミといっしょに捨てて下さい」（傍点は筆者）というのである。さらに次のページに進むと、「まゆだけを、保存する時は、まゆになって八日目ぐらいに、カッターなどで切り中のさなぎをとりだしてください。とりだしたさなぎは、台所のゴミと一緒に捨ててください」（傍点は筆者）。さすがに、これを読んだ子どもも何か違和感を感じたようであった。

「大切に飼ってくださいね」という表紙のイラストの言葉は、カイコを育てようとする気持ちを勇気づけるものでもあるし、少し大きさにいえば、カイコにこれから起こるであろう生き様を共感をもって見とどけるためにも大切な意味をもっているともいえる。なのである。「ゴミと一緒に捨ててください」という飼育の説明書にでてくる言葉は、生き物としてのお願ひ（もちろん、大人が子どもの気持ちを引き付けることを考えて書いているわけだが）に込められた心情を切り捨ててしまうことになっている（はっきりいえば、切り捨ててもいいので

すよと明言しているようなもの)。なぜならば、一般に「ゴミ」という言葉は、われわれの生活の中ではいらなくなつたもの、じやまなもの、自分の周りから排除すべきものという意味をもって使われているからである。

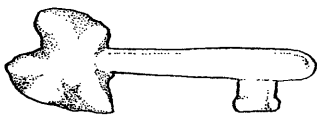
このエピソードは幼稚園での出来事ではない。しかし、大人と子どもとのかかわりのあるところでは、似たようなことがいくつもあると思う。たかがカイコ（虫）である、がしかし、されどカイコ（虫）である。たかがゴミであり、されどゴミである。筆者が些細なことにこだわっているように思われる人には、このような些細な出来事の実験の中で、子どもたちですりこまれていく感性について思いをめぐらせて欲しいということを強調しておきたい。

身近な行動と有機的つながりへの共感

はじめにも述べたが、筆者は、子どもの育ちを通して幾許かの明るい未来を共有したいという願いをもっている。なぜならば、明るい未来をイメージしにくい現実

が、今ここにあるからである。たとえば、自然界との有機的なつながりをごとく切り刻みながら作り上げてきた現代社会の中で、その社会に適應できるような一生命に育てられている子どもたちに（親の願いとは裏腹に）、ひ弱なひとりぼっちの姿を見てしまうのは私だけだろうか。次のような話を耳にした。子どもたちを連れてキャンプに行った先生からの話である。

子どもたちと河原で水に入って魚を捕ろうとしていると、立っている人の気配を後ろに感じたので振り向くと、小学生の子どもが立っていたという。その子どももキャンプに参加していたのだが、なぜか一緒に水に入ろうとはしない様子であった。しばらくのあいだ無視をしていると、子どもが不思議そうに「そんなことをして何が面白いの？」と聞いてきたというのである。逆に、



「なぜそんなことを聞くのか」と聞いてみると、「体はぬれるし、服は汚れるし、良いことなんか全然ない」という言葉が返ってきたというのである。その先生もびっくりしたそうである。キャンプに参加する子どもであつても（親に参加させられたのかもしれないが）、水遊びより自分の服が汚れることを問題にしてしまう感性を身に付けているのである。

この様な話は氷山の一角であろうと想像できる。だからこそ、そこには見過ごせない現実があると思う。自然との有機的なつながりを感性のレベルで共感できない子どもたち。耳学問的に得た言葉を並べて、自分の気持ちを説明してしまう子どもたち。この様な子どもたちを育てている現代社会に、明るい未来を期待できないことは疑いの余地がないであろう。そうであるからこそ、何が問題なのか問わなければならない。問われるべきものは社会のいたるところにある。保育としてその例外ではない。それどころか、保育は自己変化の可能性が高い幼児を対象にしているが故に、職業として子どもたちとかか

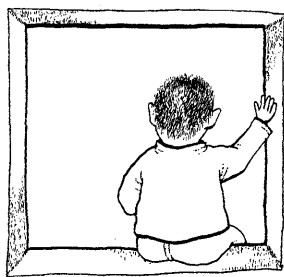
わる保育者、研究者にとつて、保育の日常は最優先課題にもなり得る。ここに、保育の日常を問う、一つの大きな理由がある。

もう一つ例をあげたい。今、ウンチのおいを消してしまう飲み薬がある。体に害はないとのことで、寝たきりの老人を看護している人や若い女性を中心に売れているらしい。それぞれに理由（事情）はあると思うし、個々のケースについては別の議論も必要になるだろう。しかし、ここでは、このことを保育の中でよく用いられる「感性」という視点で述べたい。たとえば、「自分のウンチが臭くていやだからこの薬を飲みたい」と、子どもが言いたすことを想像してみたい。保育にかかわるものならばその不自然さを感じると思う。感じるが故に、保育者は、ウンチの大切さとか役割とか少しぐらい臭くても気にしなくなるような気持ちへ導こうとするのではないだろうか。

しかし、一方で、現代社会では、そのことを不自然だと感じながらも、なおいに対する自らの拒否反応から、

おいを消すための葉を飲む保育者もいるかもしれない。なぜならば、この葉が売れているという事実からもわかるように、大人たちの中にこのような願望をもつ隠れた支持者がかなりいると考えられるからである（もちろん、病人の看護をしている方からの需要があることも知っている）。人間をも含めた自然界とのつながりとしては不自然なものと感じているにもかかわらず、現代社会の日常的な枠の中ではそれほど不自然ではないと感じてしまうこの矛盾。嫌なものはいやだ。臭いものはくさい。そう言われてしまえば、その通りであり、その感じ方を無理に変えることはできない。そして、不自然だと感じながらもその不自然なことを選択してしまう感性というものもあることを認めない訳にはいかない。しかしそれでもなお、生き物としての人間の存在を可能ならしめている自然界の有機的なつながりに対する感性的共感を、不自然だけれどもその不自然なことを選択してしまう現代社会的感性に従属させてはならないと、強く感じるのである。なぜならば、保育が、種としての人間の存

在を保証していくための自己内包的な行為であるという見方を、筆者がもっているからである。



環境（自然）とのかかわりから

さて、保育をおこなう場において、自然とのふれあいの視点から小動物を飼うことがよくある。しかし、ある動物を飼うということは、その動物が生きるために必要な環境をも抱え込むということである。その動物の生き

さまをみるということでもある。決して、ある動物の代わりには他の動物で済ませられるというように代用できるものでもない。なぜなら、その動物はその動物としての生きざましか我々に見せてはくれないからである。

たとえば、イヌとウサギを比べて「イエウサギは飼育の際に満たすべき条件がずっと穏やかで、保育者の負担も小さくて済み、幼稚園や保育所で飼育する動物として、より一般的である」というような学会でのある発表の結論ですむような話ではない。確かに、安全で楽な方が保育者にとって都合が良いこともある。しかし、イエウサギはイエウサギとしての生きざましか見せることはできないし、イヌはイヌとしての生きざまを見せるのである。子どもによっては動物の違いでそのかかわり方、感じ方も違うはずである。糞ひとつとってもその扱いが違ってくるであろう。だからこそ、それぞれに意味があるのだとも言える。むしろ、「一般的に、どの動物が保育に適するか？」という問い自体が、意味をもたない」と筆者は考える。初めにも述べたが、動物を飼うとい

うことは、その大変さまでも含めて背負うことであるし、飼う当事者の判断で決めるべきことだからである。そして、もちろん、保育所や幼稚園などで動物を飼うということは、単に子どもを喜ばせることではなく、悲しみも恐れも楽しみもそして喜びも動物とかかわることの中であじわい、想像力を高めていくことのできる環境構成を行うことに他ならないと考える。

おわりに

子どもたちに豊かに感じる心を育てるためには、自然とかかわりは確かに大切だと思う。しかし、それはただ与えていけばよいというのではなく、保育者が自然の中身をどの様に子どもたちに示しているのかと、常に問い直すなかでなされなければ意味がないということを繰り返して述べたつもりである。「汚い」、「臭い」、「面倒」といったことが自然とかかわるなかで、他のものとのつながりにおいて感性的に止揚されるような保育実践が積み上げられることを願いたい。

くどいところ、足りないところがあつたかもしれない。異論、反論を含め、目を通された方々からの御意見をうかがえればありがたい。

(付) 自然(環境)について

「自然」という言葉を、人の影響をまったく受けていないもの、人間の手がはいっていないもの、というような意味でとらえれば、日本(地球上と言ったほうがよいのかもしれない)のなかでその様な場を探すことはまったく不可能と言えるほど、現在の自然環境は人間によってその意味を(無自覚的であれ)変えられてしまっている。たとえば、北極や南極ですら大気や海水の成分に人間の活動の影響を見ることは難しくなく、フロンなどのガスによるオゾン層の破壊は、地球の自転や大気の流れに影響を受けながらであるが、人間の作業としての痕跡を明確に示している。この様な事象の中で、「自然」と「人工」という使いふるされた二項対立的な言葉は、ほとんど意味をなくしてしまったといえる。したがっ

て、自然があるとかないとかということにとらわれた見方ではなく、「環境」という視点で「人間と自然」をも含み込んで今の状況というものをつかんでいく必要があると考える。つまり、どのような自然が我々のまわりにあり、日々の生活の中でそれとどのようにかわっていくのかということが重要な問題になっていることである。このことは小川博久氏も述べているように、我々を取り巻く「環境」というものを主体としての人間を抜きにして客観視できないということでもある。

(筑波技術短期大学)

注1 根津明子(企画者)『保育の日常を問う 子どもにとって「環境(自然)」とは何か―小動物の飼育の在り方を事例として―』 話題提供者(阿部康子、高橋健介、新井孝昭)

注2 小川博久『「環境教育」における多様性をどう統合するか―エコ・ミュージアムの実践の検討を通して―』東京学芸大学環境教育実践施設研究報告「環境教育研究」第5号、11―28 (一九九四)